

小笠原（父島，母島）島外（沖縄本島）からの 購入苗から検出された生物類

○大林隆司¹

¹東京都小笠原亜熱帯農業センター（現：東京都農林総合研究センター）

小笠原諸島は 2011 年に世界自然遺産に登録されたが、外来生物の持込みに対する検疫制度は無く、登録後も農業害虫を中心に新たな外来生物の記録が相次いでいる。農業関連苗の導入実態を把握するために、2014 年、父島・母島の農業者 26 名に島外からの苗の導入に関するアンケート調査を実施した結果、半数が沖縄などからマンゴーなどを導入しており、今後もマンゴーなどの導入の意向が多いという結果が出た。そこで、実際に沖縄から苗を購入し、苗（土壌を含む）にどのような生物が付随しているか、実態を調査した。2015 年 8～9 月に沖縄の 2 業者（A, B とする）からマンゴー苗（2～3 年生）を各 10 株、15 株購入し、地上部（幹・枝・葉）に付着している生物を確認・回収後、鉢から苗を取り出し、土を少しずつ落としてバットに広げ、肉眼で確認できる生物（生体・死体）を確認・回収して同定した。その結果、9 割以上の苗から生きた生物が検出され、そのうちの約 9 割が土壌部から検出された。検出個体数は業者 A ではアリ類、陸産貝類などが多く、業者 B ではアブラムシ類、アリ類、陸産貝類などが多かった。検出種には小笠原諸島未記録のマンゴーの害虫（アカアシホソバッタ、ハゼアブラムシ）などや、近年小笠原に侵入した害虫（ツヤオオズアリ、リュウキュウウスカワマイマイなど）が含まれていた。また、業者 A, B 共、過去にニューギニアヤリガタリクウズムシ（陸産貝類の天敵、特定外来生物）の分布記録がある地域にあるが、今回の調査ではニューギニアヤリガタリクウズムシは検出されなかった。なお、現在、苗の土壌部の温湯処理の最適条件の検討や、温湯処理実施に向けた体制作りなどが進みつつある。

Agricultural pests detected at Ogasawara (Bonin) Islands in seedlings purchased from Okinawa main island

Takashi Ohbayashi¹

¹ Tokyo Metropolitan Agriculture and Forestry Research Center